

校長室だより～和光高校OB列伝 第5号 H28.5.18

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

校門を出て視線を広げると青々と育つ農作物に目を奪われる。開校以来変わらぬ田園風景に心が癒やされる。とりわけ新緑の季節はその香りも含め登下校の生徒たちに潤いを与えてきた。この地で農業を営んでいるのが井口賢一さん。和光高校第11期生のOBである。ちなみに井口さんが6歳の年に和光高校が開校しておりその当時の印象もうっすらと覚えていらっしやるとお聞きした。毎年の卒業アルバムや航空写真には当然の



ように畑に囲まれた学校が映る。ある意味学校の推移を最も身近に感じてきた方であろう。実は校地の一部も提供して下さったという所縁もあり、さらに付け加えればBコース自体が井口家の周囲を縁取っているのだ。これにはもう一つ逸話があり、実は井口さんのお父上は吉田道行先生の高校の後輩。そのご縁もあり開校当初のマラソン大会などではトラックなどもお借りしていたと聞く。

高校時代の井口さんは大和中学校時代から続けてきたバスケットボール部に入部する。当時は女子は強かったが男子は苦戦の時代。なかなか勝利は遠かった。そのバスケット部に突然鬼がやってくる。武井正人先生の登場である。弱小バスケット部がその日を境に一変する。詳しくは描けないがあっという間に強くなった。その瞬間の主役の一人が井口さんである。井口さんは懐かしそうに当時を語ってくださった。

「確かに先生は厳しかったです、その分自分たちのことをいつでも親身に考えてくださり充実した高校生活を過ごすことができました。身体づくりは基本だとよく走りよく食べさせられたのも懐かしい思い出です。辛さをみんなで乗り越えてきたので結束は強まりました。高校時代の仲間とは今でも連絡を取り合っています。」

もう一つ、心残りなのがマラソン大会。当時は狭山湖を2周するまさに持久力大会。その中でメダルと賞状をあと一步で逃した11位という結果がいまだに残念なそうです。どの部活もプライドをかけて上位を義務付けられていた時代、陸上部が多数いた中での

11 位は実は相当に素晴らしい成績でした。



7番が井口さん、中央が武井先生

さて、井口さんはゆくゆくは農業を継がれるという事で鶴ヶ島にあった埼玉県農業大学校に進学します。最先端の農業技術を学ぶ学校でしっかりと基礎を固められ、卒業後は法律や不動産について学んだり、社会勉強のためさらに都心のレストラン勤務を経験します。そしていよいよ25歳で本格的に農業に従事しました。若手後継者として、以来25年の年月を重ね、和光産直クラブの役員として地元産野菜を供給したり、地域の消防団の分団長を務めるなど多方面で活躍されています。

生徒たちの変化を良く知る井口さんは現在の和光高校についても語ってくれました。

「親父の代では畑にゴミを捨てたり悪さをする生徒たちがたくさんいましたが、最近は先生方の指導のおかげか減多に怒ることもありません。逆におとなしすぎて物足りなさもわずかですが感じます。最も近くに暮らす者の一人として和光高校のことはずっと応援させてもらいたいと考えています。以前のように部活動が盛んな活気ある学校が戻ってくることを心から願っています。」

